

# 「煮炊き」の道具

## 最古の土器は「煮炊き用」

日本列島における旧石器時代から縄文時代への移行の基準は、土器の出現にもとめられますが、土器の出現はどのような状況の変化に起因するのでしょうか。

今から約2万年前の地球は第四紀更新世末期（最終氷期末期）にあたり、人類はもっとも寒い時期を迎えていました。日本列島は近海の大陸棚の大部分が海退現象で陸化し、海峡は陸橋となって大陸と連結し、日本海は湖となっていました。その後、約1万年前に始まる第四紀完新世（後氷期）にむかい環境が一変します。地球温暖化です。海水面が大幅に上昇すると同時に、植物相・動物相も激変します。

更新世末期頃、日本列島の大部分は亜寒帯性針葉樹林と冷温帯落葉広葉樹林に覆われていたと考えられています。その後地球温暖化にともない、温暖帯落葉広葉樹林と照葉樹林（常緑広葉樹林）が列島を北上し、縄文時代前期（6,000～5,000年前）には現在とほぼ同様の植生に変化したと推定されます。豊富な堅果（クリ・ドングリ・トチなど）を生み出すこれらの樹林は、人々の食生活に変化を生み出します。ただし、堅果類を摂取するためには加熱処理やアク抜き処理が必要。この自然環境の変化に起因する食物利用の変化が、土器の誕生へと結びついたと考えられます。実際に、縄文時代草創期（13,000～10,000年前）の土器は煮炊きに適した「深鉢形」土器が圧倒的に多く、他の器形はほとんど見られません。この事実は、縄文時代開始期の堅果類を中心とする食物が「煮炊き」により処理されていたことを物語っています。また、続く縄文時代早期（10,000～6,000年前）には、堅果類や根菜類をすりつぶすための道具と見られるすり石と石皿の出土が増加します。この作業により獲得した澱粉（でんぷん）を縄文人は煮炊きによりスープのような状態で食したと推定されますが、縄文時代の遺跡からは団子またはクッキー状の固形有機物も出土していることから、澱粉を効率よく摂取するため、縄文人は煮炊き以外にもさまざまな加工食品を誕生させたことがわかります。

煮炊き具は、環境の変化への適応から必然的に誕生しますが、その後1万年以上にわたりさまざまな形状・材質変化を繰り返しながら人類史にその姿を留め続けます。

